神のあわれみ

ジャン・コー
白井健三郎・篠沢秀夫訳

新しい世界の文学

白水社

訳者略歴

白井健三郎
一九一七年生
一九四三年東大仏文科卒
現代フランス文学・文芸評論
学習院大教授
著書「現代フランス文学の課題」他
訳書 サルトル「文学とは何か」他

篠沢秀夫
一九三三年生
一九五九年東大大学院修士課程終了
明大講師
訳書 ブランシュ「ラスコオの野獣」

新しい世界の文学 18
神のあわれみ
定価 五〇〇円
一九六四年一〇月一〇日印刷
一九六四年一〇月二〇日発行
訳者 © 白井健三郎 篠沢秀夫
発行者 草野貞之
印刷者 山田博
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一—五
振替東京三三一二八
三陽社印刷・加瀬製本

神のあわれみ

Jean Cau
La Pitié de Dieu
© Editions Gallimard 1961
Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha

神のあわれみ

ジャン・コー
白井健三郎・篠沢秀夫訳

白水社

新しい世界の文学

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

白い顔の中に、白い目。このような[illegible]ーの顔は、すっかりのけぞってしまう。まるで、レールに縛りつけられて、汽車がのしかかって来るのをみつめている人間みたいだ。肌が黄色っぽくなり、突き出してきそうな骨の上に張りつめている。唇がきわめてやわらかい青さから、ほとんど真白になる。鼻すじは薄くなり、そして、ドクターの顔は、骸骨と同じ美しさを浮かべる。

「発作を起こしましょうかね？」ドクターはつぶやいた。

「まだそこまでいってないと思いますね。」マッチがいった。

マッチは妙な話し方をする。マッチが口述するのは影にむかってであり、彼のことばは監房の中のどこかに書きこまれる。見えない黒板のようなものに。括弧やイタリック、アンダーラインを引かれた語が、そこに読み取れるのだ。ちょうど今、彼は《そこまで》ということばに、アンダーラインを引いたのだ。ドクターは粗い布地のシャツを脱ぐ。牛乳のような、いやらしい白さの、いたるところ骨の突き出た上体が現われる。ドクターはそのからだを、なで、さすり、暗唱しだす。《おお、愛する女よ、肌をとおして汝の骨に触れん。復活の日に汝を見分けんがために！》

ドクターはいう。

「これはな、わしの知っているうちでは、もっとも美しい詩だよ。作者は、十一世紀にトレドにいたユダヤ人の詩人だ。」

「ほう！」アレクズがいう。

ドクターは両手で痩せた胸を押える。
「目」と彼は、人さし指で、歯茎のようなばら色のこの乳首を示して、いう。
「口」と彼は、指をへそ、その中につっこんでいう。
アレクスは、鼻が足りない、という。
「ここにくもが住んでいるのさ」と、胸をさすりながら、ドクターはいう。
「ちゃんと場所をあけてやって、奴をかわいがっているんだよ。しかし、目をさましてしまうと、奴は足を一本一本伸ばして、しまいに散歩する気になる。そうなると、痛いんだ。そのトレドの詩人はジュダ・アルビというのだよ。」
ドクターは、無数の足をもつくものことについて、ながながと話し続けた。(くも、さもなくばたこか？　事実は、おそらく、うっとり触手をのばすたこなのだ。)解剖学の講義をしているみたいに、彼は人さし指で、触手の通り道を、説明する。たこは触手の一つを伸ばし、それは腹の中にすべりこみ、おずおずと探り回る。ほかの二本は、探り探り、あばらに沿って降りて行き、胃を抱きこむ。こっちのは、へそのところで曲がって、左の脇腹の上をだらだらとすすみ、なま暖かい吸盤をぴったりはりつける。こっちのは、あまりのどへ上がって来るので、口の中へ出て来、ドクターは、歯でその先端を噛み切れると思うほどだ。
ここのこれは、とうとう、心臓をやんわりしめつけてしまう。あまりにきつくしめられると、発作だ。
ウジェヌがいう。
「いつか、たこを吐き出しちゃって、きれいさっぱりやっかいばらいできますよ。」
「吐き出したら、みないっしょに出て来てしまうよ。心臓、肝臓、脾臓、脳漿、たこがはりついているものは、みなだ。」

「それじゃあどうも！」ウジェヌがいう。

時には、この《何か》は、たこでなくて、花だ。息をしている、深海の生きた花で、けだるく、大きな厚ぼったい花びらを開いたり閉じたりするのだ。この感覚には、なにか快さがないわけではない。花びらが、夜、ドクターのからだをよぎる流れに任せてふるえるときは、すごく気持ちよくさえあるのだ。つまり、たこであり花である何かが怒りさえしなかったら、ドクターは、その何かにとりつかれることに腹をたてはしないだろう。看守が朝食のコーヒーと黒パンを運んで来た。《たっぷり食えよ。》あごの噛み合う音。シューシュー。ガボガボ。かねの湯飲みにスプーンがチャリン。げっぷ。（アレクスがあやまる。）われわれは食い、飲む。動物のように、黙りこんで。だが、人間のように、清潔に。アレクスは、魚の料理が出るときには、昔やっていたように頭ごと食べるのをやめてしまった。ウジェヌは、食べかすがひっかかっているのをひき出そうと、歯の間で口笛を鳴らすのをもうしないし、りんごの種を、ぺっと吐き出しもしない。マッチは、もうスープのにおいを嗅がないし、においの講釈もしない。ドクターはもう、そのスープの中に、髪の毛を捜しはしない。毎朝のように、われわれは、湯飲みの底にコーヒーをすこし残し、パンをいいかげんに食べた。皮を残す者もあれば、中身を残す者も、大きなパン屑を残す者もあった。去年の或る日、アレクスは、食事のたびに残すというこの決定に、猛烈に抗議した。――満場一致で採用されたものだったのに。彼は、食べ残すのは《心意気だ》といっていたのだ！　われわれは彼にこの決定の意義を思い出させた。このことがあってから、われわれのうちだれも、この共同のやり方を、この点については、正当でないなどと、夢にも思わなかった。これについては、三年前、新しい朝勤看守が来たことがあった。最初の日にまず、彼には驚くことがあった。彼が戸をあけると、われわれはいっせいに起き上がって《お早ようございます！》と、あいさつしたのだ。

めんどりのように目を丸くして、彼はわれわれをみつめた。そして、そのまなざしの中を、鶏の気むずかしい怒りがかすめた。だが彼に何ができただろう？　われわれは礼儀正しかったのだ。そして、極度に礼儀正しい人びとにたいしては、それが囚人であっても、怒りはまずい手である。彼は唸った。肩が震えた。目に見えない人間に横面を張られた大男みたいだった。出て行きながら、彼は、鉄の重い扉をたたきつけ、格子という格子が震えて鳴った。マッチはにやりとした。

「そのうち慣れるさ。」ウジェヌがいった。

三十分後に、彼は鉢をかきあつめに戻って来た。湯飲みの底のコーヒーと、木の皿の上のパンの残りを見たときの、彼の驚き！

「病気か！」彼はたずねた。

「いいえ。どうして？」マッチがいった。

「コーヒー残すのか、パンも？」

看守は、同類の多くのように、話を手短にするためか、または、看守たるものは、ことばというこの貴重なものを、囚人相手に使わなければならないときには、節約するものだということを示すためか、人称代名詞を省略した。彼はくりかえした。

「残すつもりか？」

大きな身ぶりで、彼はわれわれに、湯飲みの底や、パンの塊を示した。われわれはびっくりして彼をみつめた。

「おれのつらをよごす気か？」

われわれは返事をしなかった。この看守にめんどりの愚鈍さがあるとしたら、けちけちと意地の悪いところは、なにかの猛禽だ。だんだんと、それから毎日、彼は、われわれのコーヒーとパンの割り

当てを減らそうと全力を傾けた。われわれとしては、名誉にかけて、方針を貫いたが、二週間後には、一日の割り当ては、四分の一に減っていた。そのうち、十分の一になった。それからもとに戻った。

ドクターの発作は、急速に遠ざかっているようだ。が、彼はこわかったのだ。額に汗の滴が粒になり、目の青さが、ときどき、深いすみれ色になる。彼は、一九〇〇年ごろのえび釣りのようにズボンをまくり上げ、神経質にひざをひっかく。きわめておだやかな声で、彼は、自分の恐怖はいまや進行性の恐怖なんだと説明する。《以前は、わしは発作がこわかった。今は何でもないことがこわいのだ。昔、わしはてんかん持ちを一人知っていた。そいつは腰掛けにすわって、壁の上に見えない手が象形文字を書いているのを、じっと見ていた。文字はますます複雑になる。全身の注意をこらして、目を壁にすえ、手の動きを追っていた。不安は大きくなる。象形文字が彼に不可解になる瞬間が来て、絵文字の千の模様の意味が消えうせるその時に、発作が起こるのだと、知っていたからだ。だから、しゃっくりをしながら、唇はまくれかえって、壁のほうへ歩いて行き、むせび泣きに引き裂かれて、奴は手の皮をかきむしるほど、狂暴に壁の石をこするんだ。》ドクターはその身ぶりをして見せる。その男は自分の友だちだったんだ、と彼はつけくわえる。彼はその男にひとつの治癒法をすすめた。《絵ができるのをながめていて、それから、その絵の意味がわからなくなるその瞬間に、目を閉じるといいですよ。》友だちは、そのやり方は不可能だと答えた。《ぼくはいつかはすっかりわかるんだと思っているんです。そうなったら、ぼくは救われるんだ。》――《いや、あの手が書きくたびれる前に、きみはわかろうにも疲れ切ってしまうよ。》《もし目を閉じたら、救われる望みがなくなってしまう。》《発作は起こらなくなるさ。》《ぼくは、石っころになってしまいますよ、そうしたら。果物の皮に、しらみに。》

ドクターは続ける。《七歳の時だった。わしは、絶対的知性とは何かを、気違い馬のどんよりした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大目玉の中に読み取ったのだ。押えつけられて、馬は、その場でからだじゅうを震わせて立っていた。胸には赤い泡がむくれ上がっていた。馬子は、動かなくなった馬を静めようとしたが、むだだった。のどの奥にかかった音とrをひどくころがす奇妙な声の響きが、愛の言語の誕生を予見させた。あの日、このむきだしの恐怖が電気のように地面から、馬の足へ上がって行き尻にさざ波のようなしわを寄せているのを見たとき、あの日、わしはまさに、自分が馬であるのを理解したのだ。》

彼は笑いだす。われわれはみな、心から笑った。実際、ドクターは子供のような、人をひきこむ笑い方をするのだ。何度となく、ドクターは、自分のふるまいについて、わしは馬なのだからといいわけをしたことだったろう！《もしキリストがこの世に戻って来たら、わしを、いきり立った豚からじゃなくて、くつわで口を引きあけられて黄色い歯をむき出した馬から生んでくれるだろうよ。》エレヌ、彼女は、笑わなかったものだ。《これ》をおろかしいと思わなかったのだ。だが、だれがおかしがらせようとしたというのだ？《わしはいつでも屠殺場の入り口に出向いてやるよ。そして堂々と、わしは馬なんだと名のってやる。四つ足で這って歩くし、草も食べるし、畑も耕そう。だけど、わしに、rとのどにひっかかった音がいっぱいある新しいことばで話しかけてくれるならの話だ。そのことばの、聞きなれない調子が、わしに平和というものを教えてくれるのだから。》兵役の時《騎兵隊に勤務した》と称しているウジェヌは、親しみをこめて、ドクターに、馬のように扱ってあげましょうと、申し出る。

「感謝しますよ、ウジェヌさん。だが今ではもう、おそすぎる。もっと早く、うんと早く、生まれた時からそう始めなきゃならなかったんだ。ふざけて、馬だと思ってるんですよ。実際のところは、わしは自分が人間だと知っているんです。」

マッチがニュースを放送するのを待つ間、アレクスはいつもの朝のように、体操をはじめた。

「胸の筋肉なしじゃ生きていられませんよ。起きるとすぐ、目をあけるとすぐ、胸の筋肉をなでてみて、満足するんですよ。りっぱなもんだけど、前はもっとよかったんですぜ。すばらしかったんですからね！　皿みたいに丸くてね――わたしゃあ、四角い胸の筋肉はきらいでね――それで、タイヤみたいに張り切って堅かったんですよ。それに、腹ときたら！　ああ！　あのころのわたしの腹を見てたらねえ、シメオンさんのいってた、わたしの《腹帯》をねえ！　もしがっしりしたからだをしてなかったら、わたしゃあ死んだほうがましだね。いつだって、がっしりしたからだをしているのがうれしかったんだ。それだけで十分だったね。がっしりしてる、それだけだね、この世で値うちのあるのは。町ん中を歩いてるとき《おれはがっしりしている！》と自分にいう。女の子をひっかける、そして自分にいう、《おれはがっしりしてる！》がっしりしてさえいればなにもこわいものはない。なんていったらいいのかな……　みんながペストでくたばってる町に住んでいて、自分にこういえる奴みたいなんですよ、《へいちゃらよ！　おれは予防注射してあるからな！》ってね。がっしりしていりゃあ、映画館にすわってるみたいなもんだ。落ちついて、足を伸ばしてね。入場料は払ってあるんだから。だれも引っぱり出しに来るわけはないんだ。みすぼらしい奴とか、せむしは、入場料払ってないようなつらをしてるよ。奴らを裸にひんむいて、ばらしちゃえばいいんだ。おう、やせあしさんよ、穴へはいんなよ！　はと胸だんな、穴へ行きな！　穴だよ、ぶくぶくビール腹じいさん！　穴へ落ちなよ、紐腕のやっこさん！……ガウンを脱いでね、リングの上で、試合の晩にさ、それから、松やにの粉でかかとをこすってるときは、わたしゃ王さまだったね。みんなが、わたしの胸を、背中を、足を、腹をみつめてたね。ライトを浴びてるより熱かったものよ。わたしゃはっきり感じたね。みんながわたしの肌に接吻して、なめてるんだ……そのことを考えるとさ！　……ああ畜生！」

アレクスは石のこぶしをかためて、半ば開いた左の手のひらにひびきのいい《フック》をかませる。

この身ぶりは、アメリカ映画によくある身ぶりだ。監督はそれによって、主人公がいらだっていて、混乱した状況からどうやって脱け出すかわからないでいるということを示すのだ。たいてい、アメリカ映画では、主人公はこの身ぶりをしてから、決心をする。アレクスの身ぶりはほとんどみな、西部劇映画からの借りものだ。だが、だれもアレクスの役を書いてやらなかったので、彼には役どころがわからないし、支離滅裂なことをいう。だれも彼の人生に形をつけてやらなかったので、彼にはどんな結末をつけていいのか、けっしてわからないのだ。人生は彼の背後にあり、形もつかない巨大な塊で、それを、或る事件が、バラバラにしてしまったのだ。彼はののしる。どうやってこいつをくっつけたらいいんだ？　呪文のように出て来る悪態は、いつも或る一つのいいぐさで終わる。《カディ事件についちゃあ、ありゃわたしのせいじゃないんだぜ。》それから、沈黙がある。よどんだ、アレクスの沈黙。この沈黙のあとで彼はいつもいう。――《試合の十日前に、奴はスクーターの事故を起こしたんだよ、それで包帯でぐるぐるの頭でトレーニングをした。奴のマネージャーは、マネージャーはみんなそうなんだが、きたねえ野郎だった。スパーリング・パートナーに〈右側はたたくなよ〉なんていいながら、カディにトレーニングさせていたんだ。試合の晩、あのアラブ小僧は、なんでもないみたいだった。包帯なんかしてなかった、ほんとに。だけど、中のほうで何かぶっこわれてたんだね。わたしゃあ、なんにも知らなかった。チーン！　始まりだ。たたいたね、わたしゃあ。つんぼみたいにたたいたね。ごきげんだったね。まるでケーキだよ。右側にジャブをきめるたびに、カディのしかめっ面がよく見えたよ。抜け目なく右側をねらい打ちしてたんだからね。ときどき、奴は応戦した。なにしろ、勇気にかけちゃあ、奴はしっかりしていたからね。いい試合だったよ。たたくのがあんなにいい気分だったことはないね。第二ラウンドの終わりのゴングの時、アラブちゃんはまちがえて、わたしのコーナーへぴょんぴょんやって来たもんだ。方向感覚がなくなって、もう自分のセコ

ンドの見分けもつかないんだ。だけど、見たところは何でもない。こてんこてんにたたかれたのに、ばらみたいにさわやかよ。わたしゃ、思ったね。〈おまえさん、コーナーまちがえるようじゃ、うまくないぜ。まだお砂糖がほしいのかい、よし、くれてやるよ〉ってね。第三ラウンドはもうケーキなんてもんじゃなかったね、バターだ。わたしゃ、でっかい道路標識をぶったおすぐらいのフックを二発カマした。三発目のフックを力いっぱい、右側に入れる。奴はちょっとよろめく。そこをアッパーカットで持ち上げると、奴は腹ばいに倒れて、ノック・アウトさ。アンパイアがカウントを始める……ナインで、奴は、人形みたいにぐにゃぐにゃになって、はこばれていった。わたしゃ、奴をかつぐのを手伝ってやったよ。グローブがじゃまだったけどね。だって、お客はそういうのが好きだからね。倒れた敵を助け起こすなんてのは、堂々としてるからね。心の底では、うれしくて気が狂いそうだったよ。K・O（ノック・アウト）だからね、こんなすてきなもんはないよ。しかも野郎（やつら）をばっさり眠らしちゃうK・Oってのは、ただすてきなんてもんじゃない。宣伝の上からいったって、たいしたもんだ。カディは担架に乗せられた……　奴は、控え室で二時間後に死んだ。脳出血だ。そうだったんだよ。わたしゃ、殺し屋といわれて、契約はみんなだめになった。おまけに、〇・二の話があった……》

「ああ、〇・二ね。」ウジェヌが、いかにも事情に通じているように、いった。

「医者のばか野郎が……すみません、ドクター。わたしゃ、お医者さんのことみんなをいってるんじゃなくて、あの野郎のことをいってるんでさ。その野郎が、わたしの右の目は、もう、〇・二しか視力がないって気がついたんでさ。それだから、協会はわたしの免許を取り上げたよ。奴はそれに、わたしが脳疾患で、第一期だっていやがった。」

「ああ、脳疾患ね。」ウジェヌがいった。

「そうさ。どうも、ボクサーが、いつもきげんよく、わけもなく笑って、人間という人間をたたき

殺してやるなんて誓ったりするときが、そうらしいんだ。ボクサーが、おれは王者の王者って思いこみだすと、脳疾患の第一期なんだ。わたしのはまだ、お愛敬ぐらいのもんだったんだね。もう一つの時期てのは、さびしがるっていうやつ、あの医者がいうには《孤独への欲求》だとさ。とうとうおしまいの時期が、記憶喪失で、けものみたいになる。それにしても、あのカディとの試合は見るべきだったね。それに、カウント取ってるあのアンパイアもね。ワン、ツー、スリー、フォー……奴がやめなければすてきだったろうな。ナイン、テン、イレブン、トウェルブ……」

「わしは、その永遠にカウントしているアンパイアが気に入ったよ。それに、彼はやめはしなかったんだよ、アレクス君、彼は今でもカウントしてるんだ。……聞いてごらん、きっと聞こえてくるよ。」

ドクターは、彼独得の、逆らえないしかたで、笑った。そしてわれわれも彼にならった。アレクスは最初に笑いやみ、ふぬけしたような目でドクターをみつめた。彼に質問しようとしているようでもあり、飛びかかろうとしているようでもあった。その呆然としているようすは、泣き出そうか怒ろうかとためらっている、ふくれ面の子供のようだった。しかし彼は、考えていることをのみこんでしまった。犬が荒い鼻息を出すように、彼はからだをゆさぶった。

「方針としては、いつも相手の弱いところをたたくことだ。《右のこめかみにレフトをたたきこめ》ってシメオンさんはいっていた。だから、わたしがアラブ人をはたいたのは、そこなんだ。つらの右側をね。」

ドクターは、手をこすりあわせながら、いう。

「いつもそこをたたかにゃならん。右側だ！　右側だ！　イッヒッヒッヒ！　アレクス君、赤ん坊の脳天より柔らかくて、かえるののどみたいにひくひくしている、そのこめかみをだよ！　そこだ

よ、イヒッッヒ！　そこだよ……ヒッヒ！」

今朝、アレクスは、床に手をつけ、腕の屈伸を、七十回までやった。顔を真赤にし、汗にまみれて、彼は起き上がった。目は充血し、額のちょうど真中を、紫色の太い血管が水平に横切っていた。わたしは、アレクスの額にこのように刻まれる血管が、好きではない。兇暴な静脈瘤のようだし、力を出したときばかりでなく、怒りでもふくれるのだ。けれど、このようなとき、鶏冠のように、王位のしるしである古代エジプト王の冠のように、血管のふくれ上がった彼は、美しいともいえたのだ。両手をひろげ、激怒に漲って彼が向かって来たとき、女たちが最後に見たものは、これだったのだ。血管を見つめながら死ぬ……　ときどきわたしは、これがアレクスの額の真中に宿る大きな紫色のみみずで、彼の脳を食い荒らしているのだと思う。アレクスは善良な奴だ。きわめて善良であり、きわめて優しい。だがこのみみずがいて、目を覚ますと、血でふくれ上がり、われわれの友の頭から、すべての善良さを空っぽにしてしまうのだ。そうすると、彼は人殺しをするのだった。ドクターは、胸にたこを持っている。アレクスは、頭に毛虫を持っている。われわれは四人ともすべて、恐ろしい小さな動物に住みつかれ、それがわれわれに多くの悩みと喜びをあたえてきたのだ。

今度は、アレクスは、想像の紐でなわ飛びをしている。紐は、想像上の、しつっこいリズムで、床をたたく。なわ飛び五分間、シャドー・ボクシング三ラウンド。ウジェヌは、声を出さずに唇を動かし、本物のストップウオッチをはめているように手首に目をすえて、秒読みをする。一八〇で、彼が《カーン！》と鳴らす。するとアレクスは、一分間、監房の格子のついた小窓の前で、深呼吸をする。六〇でまた、ウジェヌの《カーン！》がはいり、アレクスは、異常な熱狂で、影と撃ち合いだす。彼は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com